

【資料 ⑩】

# わが郷土なみえ

西 徹雄・末永福男

山田秀安・山田清三・三瓶 陸 著

# わが郷土なみえ

西 徹雄・末永福男  
山田秀安・山田清三 著  
三瓶 陸

昔の浪江町は、権現堂村を中心に宿場町として町を形作っており、宿場の名前を、高野(こうや)の宿とっていたようである。

権現堂のいわれは、嘉吉年中(一四四〇ころ)この地方の領主標葉清隆が、西台に城を築き、鎮守として羽黒権現を祀ったことによるといわれている。

明応元年(一四九二)標葉氏滅亡の後、羽黒権現は本城に遷座され、恵比寿神社とあわせて現在の浪江神社に祀られた。

かつての高野宿は、西から東に長い町で、現在の本町通りと、本城通りの一部(現在の渡辺電気あたりまで)だったと伝えられている。

双葉方面からの道は、鴻の草の北側で旧葵の岬(あおいのくき)にかかり、現在の鉄道に添うように北上する。

旧葵の岬は、現在の県道より二〇〇メートルほど東側によつていたようで、双葉町側には、現在も古い遺型が残っている。

現在、高瀬の諏訪神社境内に残る西行の歌碑に「陸奥の高瀬の清水きてみれば、葵の岬のそばにこそあれ」と刻まれているが、西行がここを通過したころの葵の岬も、果たしてここであったのか、高瀬の清水はどこに湧いていたのかなど、興味の尽きないところだ。高瀬川を越すあたりで、現在の鉄道橋梁の東五〇メートルぐらいの地点を通り、牛渡部落の南東の角から、現在の浪江保育所の東側、井上建材の東、旧山村医院の西側と通過し、現在のワム旅行社のところで、宿場街道に合わさる。

一方、小高への道は、現在の鹿島浪江線を通る道のほかに、藤橋不動尊の下から、北方の二つの

沼の岸を通り、下浦、行津、を経過する二つの経路があり、ともによく利用されていたようである。

宿場の中を通る街道は、同じ宿場町（一説には飲楽街ともいう）の幾世橋から、棚塩とつながって、榎倉村（現在棚塩の一部と、請戸の一部）で渡船によつて請戸ともつながっていた。

その他にも、浪江保育所の北側で街道から分かれ、東進し、浪江町宿場東方付近を通り、辻で宿場街道に合わさる道もあり、双葉方面からの旅人には利用されていたようである。

幾世橋の宿場は、多くの遊女を抱えた宿場だったのに対し、高野宿は周辺産物を商う商業地区、宿場役所や、駅馬の駅なども併せ持つ多面宿場であったようだ。

高野の宿場街道は、平安時代にはその下地的な集落があったようで、後の高野宿よりは、いくぶん西北によつていたとみられる。東北電力浪江サービスセンターの北あたりまで伸びていたようで、平安時代ころのものと見られる土師器などが出土する。

当時は、現在の本城通りの南側は、相当の面積にわたり耕地になっていたようで、平安参理の跡が現在の町道に名残りをとどめている。

時代が下り、標葉清隆が本城館を築いたころは、その周辺に集落があったとは考えにくいので、集落はかなり東により、後の高野宿に近いあたりに移動していたものとみられる。

「東奥標葉記」の一節に、「標葉重隆（双葉町新山の城主）が、清隆の家臣新谷、半谷（原文では榎谷）の両名に遺恨をもち、居宅を襲い両名の子供を川に投げ込んで殺し、岩城氏を頼つて逃げた。後にその場所に里人たちが塚を築き、新谷塚、半谷塚と称した……」という文が残されています。

二つの塚は、明治時代まで浪江神社の南西、150メートル位のところにあつたということなので、その当時は、本城館にほど遠くない範囲に家臣たちの住む屋敷が点在していたこともうかがい知れ

るのである。

さらに時代が下がり、江戸時代に入ると、元禄ころには、相馬藩主昌胤公が幾世橋村（この当時の村名は、泉田村、後に昌胤公の発案により幾世代にも掛ける橋という意味の幾世橋村に変わった。）北原に御殿を造営し隠居した。

ために、幾世橋村は宿場町の要素に加え、侍の屋敷町の様相も合わせ持ち繁栄したのである。

江戸時代は、民情も安定し、同一の藩内の往来はある程度自由になったが、物見遊山といわれるような、後の観光旅行などは許されず、唯一の例外は、社寺、仏閣への参拝のための旅行だった。

このため、集落ごとに、出羽三山をお参りする「御山講」や、伊勢皇太神宮にお参りする「お伊勢講」金華山、古峰ヶ原などにお参りする講中などが作られ、毎年、または数年ごとに何人かの人々が代参の旅に出ることも多くなつてきたし、呉服、衣類、薬、などのほかに、瀬戸物などを背負い商いをする人たちの往来も盛んになっていたようで、宿場町はこう言つた人々でにぎわつていたようである。

ここで、高野宿の集落が、平安時代から江戸時代までの間に、なぜ二三百メートルも東の方に移動したのだろうか考えてみよう。一つには、相馬領になつて、本拠地の小高、あるいは中村への通路に添つた方が便利だったこともあつたと思われるが、もう一点は、西または北西の風のときの火災、という災害にも起因していたものと思われる。

ときに、安政六年（一八五九）二月九日未の刻（午後二時ころ）おりから西よりの強風の吹きつる中、町の西はすれに近い鍛冶屋から出火、強風にあおられた火災は、たちまちのうちに宿場町を灰塵に帰してしまった。このとき焼け残つたのは、わずか三戸であつたということである。

当時の建物は、屋根は茅葺きや、木皮葺きがほとんどで、木羽葺きなどの家は高級なものであり、瓦葺きは希少だったといわれている。

一度火がついてしまった建物は、壊しながら水をかけるほかなく、その道具も、竜吐水（大型の水鉄砲）や、桶ぐらいのものだったから、まったくのお手上げ状態だったと思われる。

この大火に至る前にも、二・三度に限らずやや大きめの火災があったと伝えられており、そのたびに、家を作り直さなければならなかった人々の苦勞は、大変なものだったと思われる。

江戸時代の末期になってさえこの状態だったわけですから、それ以前の防火体制などは、もともともお粗末だったと考えられるので、いったん大火になるたびに、場所を移して集落を形成していったものであろう。

この安政六年の大火を契機として、町の人々のあいだから町の作り替への声が上がリ、時の陣代和田久太夫を中心に、藩に嘆願を行い、これが認められて翌萬延元年（一八六〇）南北に長い新町通りが完成した。

町は通りに面して、真中には水路が通され、水路に添って柳が植えられ、町の西と、東の裏通りにも、それぞれ水路が設けられた。

特に、町の西裏の通り（現在の浪江小学校前の通り）は、牛渡街道へとつながる街道になっており、街道と住宅地の間には防風林が設けられていた。

さらに、町の真中には、火防地としての空き地が取られ、出羽権現が祀られた。（現浪江神社の前で、羽黒権現から名称の変わったもの、今は浪江郵便局になっている）

住民への土地の配分は、もともと住んでいた街並みの順番を重視したらしく、本城通りの下の方

から、本町通りの上の方に住んでいた人たちは上町の方に、本町の下に住んでいた人たちには下町の土地が配分されたようで、古くからの新町通りの人たちが、元町通りに持っていた土地を見れば、うかがい知ることができる。

一般的には、このときに火災にあわない町を願って、「浪江」と命名されたということになっているのだが、旧「浪江町史」の著者故石川正義氏は、その著書の中で、浪江という地名がつけられたのは、どうもそれよりはいくぶん前からではないかと、登場する文書名などをあげておられます。

「奥相誌」は、安政二年から相馬藩侯の命を受けた藩士齋藤完隆によって編纂が行われ、明治に入り取り止めになった書誌ですが、その「奥相誌」は、各村の項で、権現堂を次のようにとらえておられます。

### 権現堂村

「地勢平坦、四方山なし、南北に川の流れあり、村域の東西九町、南北十町、東は幾世橋村に接し、西は川添村に接す。南は高瀬村に境し、北は西台村に界す。村内に南北の街路あり、駅舎あり浪江町という。」

と書かれておられますので、このころにはすでに浪江町という呼び名が一般化していたものと見られる。

ちなみに同書によると、天明六年（一七八七）当時の権現堂村の人口は三百四十四人、戸数は百七十四、内十七戸、四十六人の給人（士族）、ほかに馬が四十匹となっています。

また同書は、「幕永五年から、二宮尊徳先生のご仕法を取り入れ、大いに成果が上がっている。昔から人々は、農業とともに養蚕に精をだし、良質の繭や、生糸を産している」と記している。

さらに、同書では「浪江駅」として、次のように書いている。

「浪江駅 旧高野町という。寛政年中（二七八九）改めて浪江町と名付く。西東市街の長さ四丁、街心に西東の通水あり、戸数八四を連ぬ。」とあり、さらに、安政年間の大火と、その後の町作りなどを取り上げている。

その他に、浪江町の項には、「公館 藩侯の旅館なり、渡辺甚左工門これを守る。郷役所 広畑にあり、牧民官会す（住民が公の会議に集まる）有司恒にあり（役人が常駐している）演武場 槍術、砲術の二か所あり」などとなっており、この地方の行政の中心地としての町の様子が表されている。

旧「浪江町史」で、石川正義氏は、領内の質馬の里程表に記された地名をもつて、「真相誌」に言う「浪江町」寛政改名説を否定し次のように述べている。

文化十四年（二八一七）

○長塚（双葉町）より高野まで一里八丁

○高野より行方郡小高まで二里二丁九反

この時点では高野であり、里程表は、藩において作成した質馬の駄賃を決める基であるから、地名等は相当信用できるものであつたらうし、次にその後の改定によると、

弘化二年（二八四四）

本道、小高より浪江二里半本馬百二十文

浪江より長塚二里半本馬六十一文

とあり、文化から弘化年間の約三十年の間に変わったもので、「真相誌」で言う寛政よりは後のことではないかと記述している。

いずれにしても、江戸時代の後期には浪江町という呼び名が定着し、幕末のころには広く使われていたことがわかる。

「巡邑日記」は、江戸時代末の相馬藩家老熊川兵庫が、相馬藩主相馬充胤公の随伴として、各村々の民情の視察と、在郷給人たちの軍事教練の成果、二宮ご仕法の進捗状況をみることに、生活困窮者の救済、善行者の褒賞、幼年者の学問振興などを目的として、領内を巡視したときの日記ですが、それによると、藩侯の領内巡視は三回、安政五年（一八五八）、同七年、文久三年（一八六三）で、いずれの場合も、昼食を浪江町渡辺甚左工門方（公館）で摂り、「浪江町」と記述されており、ことに、大火は、安政六年のことだから、大火のときには、すでに浪江町になっていたことがわかる。

しかし、ここで言う「町」は、後の町村制の中で制定する「町」ではなく、単なる繁華な場所としての「町」であり、いまで言う「街」の観念の方が近かったのかもしれない。

浪江町が、市町村制の施行により、正式に「浪江町」となったのは、明治三五年ですが、市町村制は、明治三年に施行されていたので、その間は、浪江村、それ以前明治五年には戸籍法が施行されているが、その時点では、権現堂村、後に旧浪江町の大字単位の村が組合を組織した「権現堂組合村」が正式名称となっている。

それ以前は、集落の名称としての「浪江町」と、正式な町村名の権現堂村とが、並行して使われていたものと見られる。

## 裸参り

68

浪江町の、新町通り換線は、先に述べた通りだが、新しく市街を南北に作り替えただけでは、当時の人々の災害（火災）に対する不安を完全に取り除くことができなかった。

そこで、権現堂陣屋手代吉田作内は、代官和田久太夫と相談し、自らが中心となって、若者たちを語らって裸参りを考案し、実行した。

鎮守の出羽神社で御赦いを受けた若者たちが、下着姿で市街地を走りながら町の家々に長柄のひしゃくで水を掛け、これに両側の住民が水を浴びせ、一年間の、無火災と、息災を祈願する…というものだったが、明治の初年、時の警察署長の下着姿では見苦しい…との勧告により、白い晒の袴を着るようになり、今に残っている。

集落形態の作り替えと同時に始められた祭として、裸参りを取り上げたが、お祭りには、そこで暮らす人々の、いろいろな願いが込められているもので、たとえば「市」を例にとれば、最初は、鎮守の祭礼の日に、近郷近在の人々が、参詣に集まり、そのついでに物と物を交換する…：交易の場が始まりだつたと見られている。

次に、やはりこの頃から始まったと言われている十日市について述べてみよう。

## 十日市

十日市は、旧暦の一月十日、出羽神社の祭礼にあわせて市を立てたのが始まりで、近郷の人々の交易の場として栄えてきた。

同時に、幾世橋村には六日市があり、一月六日に開かれ、栄えていた。

幾世橋村（北幾世橋）は、先に述べたように、元禄時代、相馬昌胤公が多くの家臣を引き連れて隠居した場所であつたため、昌胤公の没後も、浪江に負けないほどの繁栄を誇っておりまして。

ちなみに、「奥相誌」には、元禄時代二〇四戸だつた戸数も、後の嘉永二年になつても二七戸、七二三人が住み、一六四人が給人、郷士などの士族、ほかに馬が九〇頭と記されている。

また、昌胤公在世の頃には、「市店稠密にして、旅宿、茶寮、酒店などあまたあり」とその繁栄ぶりも紹介している。

これほど繁栄した幾世橋の村だつたから、六日市も、当然にぎわつたことだろう。

しかし、時代が移り明治時代となり、鉄道の敷設が話題となり、幾世橋村を鉄道が通ることになつた。

当時の一般の人々は、鉄道とはどんなものか知る由もなかつたが、博学といわれた人たちは、「鉄道が通ると、振動で稲の花が落ち、米の実が入らなくなる。」とか「汽車の煙で、桑が真っ黒に煤け、蚕様が、繭を掛けなくなる。」などといつて反対した。

その結果、鉄道は、高瀬トンネルから大きく迂回し、浪江のほうを通ることになつた。

69

明治三十六年、鉄道が開通すると、それまでの外來者、旅行者は鐵道を利用することが多くなったため、浪江町が発展し、幾世橋は、衰退してゆくこととなります。

当然、十日市は、六日市よりにぎやかになり、六日市は寂れ、廃止されてしまった。

昭和二十年代の十日市は、近郷の農家が、米を売って手にしたお金で、冬を越すための衣類や、日用雜貨などを求めてにぎわったものだった。

サーカスなどのほかに、多くの見せ物小屋が掛かり、香具師の出す露店は、カーバイトの青白い明かりが、夜遅くまで灯って客を誘っていたものである。

一方の農家は、田畑の仕事の仕上がりを十日市までに……と決めて励みましたが、子供たちも、十日市にももらえるお小遣いを当て込んで、家の仕事を手伝ったものだった。

この項では、高野駅から浪江町に変わった時代、つまり江戸時代の後期からあとの事柄をまとめてみた。

浪江と、幾世橋に舞台が集中しましたが、当時のもつとも栄えた二つの地区の歩みを取り上げることによつて、この時代に対する理解を深めて頂ければと思うものだ。

なお、江戸時代の半ば過ぎ、元禄年間には、大堀村の給人半谷休閑らによつて創められた大堀相馬焼も、この頃には、相馬藩の庇護のもとに発展を遂げ、幕末の頃には百を超える窯が、盛んに黒煙をあげていた。

大堀相馬焼に関しては、項を別にして述べているのでここでは省略させてもらうことにする。また、大堀相馬焼を始め、この地方の産物の積出しや、江戸を始め、南部の鉄などの全国の産物の陸

揚げで賑わった請戸（請戸港は、原釜港と並び、相馬藩が公認する港だった）地区などに関しても、新しい「浪江町史」の中で取り上げられることになるので、ここでは触れてはいない。